

“法燈国際化”目指す

留学僧を派遣、受け入れ

国際交流にもさまざまな形がある。国境を超えた人材育成の育英事業を続けているのが横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長、事務局 横浜港南区日野中央一ノ二ノ九・曹洞宗善光寺内）である。各国へ留学僧を派遣し、また日本への留学生を受け入れ、滞在に必要な経費と往復旅費を給付しており、設立から十六年の間に採用した育英生は十九カ国一地域・九十人へのぼっている。

黒田理事長は昭和四十四年八月、「真の平和と

人類の幸福は正しい教えに依って創られる」との信念のもとに、「一宗一派の偏見にこだわらず大聖釈尊の説かれた生きた正しい仏教を高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献する」ことを願って新寺建立を發願、その三年後、横浜市港南区日野公園墓地の一角に善光寺を設立した。この地を選ぶとき、「私の求めていた、やすらぎの寺はここだ、と直感した」と黒田理事長は回顧している。「墓碑二万基を擁する壮大な日野公園墓地。ここに集まる多くの人たち。神戸、

長崎、函館と並ぶ国際都市、横浜のど真ん中。私はその小さな寺を布教の拠点として、世界に向け新しい情報の発信基地として活用したい。さらには檀信徒の研修センターとして、仏教の本来の使命と、国際化を果たす拠点として育てあげ、理想的な寺院を創ろうと決意したのです」——善光寺の原点がここにある。

育英会は、善光寺開創十五周年の報恩事業として黒田理事長が発願し、昭和五十九年一月十五日に発足した。留学僧の派遣・受け入れを援助するこの育英事業は、「一カ寺としては破格の企て」として一躍注目されたが、国内での反響以上に、韓国、中国、スリランカ、台湾、バンラデシユなど、アジア各国から日本に留学する優秀な僧侶や学生たちが帰国後、日本での留学体験を政府機関や所属する僧伽に報告する中で、善光寺育英会への国際的な評価は高まった。

スリランカ政府公認の慈善団体「サラナンダ

財団」が平成十年六月、黒田理事長に「国際栄誉賞」を授与したことは、善光寺育英会に対する国際的評価を端的に示している。

この事業の国際性は、単に舞台を世界に広げたところにあるのではない。「仏法興隆、世界平和に貢献したい」という理想を檀信徒とともに実現していることにある。

黒田理事長は、檀信徒に「毎食ごとにおかず一口分だけ減らして協力してください。それで熱意ある若者を留学させたいのです。世界に仏法を広げる人づくりのために。未来の平和のために！」と呼びかけ、「法燈の国際化」を目指す国際的な育英事業に取り組んでいる。

（注 平成12年3月30日付『中外日報』の「宗教と国際交流」特集）より転載しました。）